

野外活動や外遊びでの危険

リスク★リスト

1. 「不快」と「危険」の区別をする。
……不快を遠ざけようとするあまり、「心的危険」の行動になる傾向がある。
2. 事故は複数の原因があわさって起きる。
……心がけながらも事故に遭遇する。想定外は常に発生する。
3. 「こわい」を強要しない。励ますことは、ケガにつながる。
……緊張すると体が固くなる。目標は与えるものではない。
4. 行動中の体力回復は早くみえても、翌朝に熱を出しやすい。
……幼児（小学2年生以下）は自覚体力より「やりたい」を優先する。
5. 熟知した上で、危険を恐れず。
……野外活動の体験欠如、遊び喪失が招く「危険」を回避しよう。

野外で出会うかもしれない 危険な？いきもの

ハチ類 スズメバチほか

ヘビ マムシ、ヤマカガシ

大型動物・小動物 カメ、ザリガニ、イノシシ、野犬

いやなムシ ムカデ、アブとブヨ、クモ、蚊、マダニ

毒のある植物、きのこ

動物の死がい

道に迷う危険 —— 〈みち〉とは

砂場のバイ菌

動物をさわったあとの手洗い

泥だんご はだし保育

食中毒

熱中症

池 かけ 人工構造物

交通事故 —— 〈歩行者主権〉のまちづくりを！

(参照) 野外における体験活動保育運用指針 (ひな形マニュアル) →#21

〈安全〉をテーマにすると、なぜ〈保険〉の話になるのか？

〈保険〉はケガ等、身体的安全を保障するものではない。

虫よけスプレー
服装

リュックサック
(水筒)

スズメバチ



9,10月に、刺される被害が全国的に多い。

手や棒などで払わない。
姿勢を低くして1分ほど見送れば飛び去る。

ミツバチであっても「アナフィラキシーショックの可能性はある」と、野生生物の関係書では警告されている。ミツバチとスズメバチの見分けは容易だが、アシナガバチなど数多い種類を見分けることは、図鑑等書物では困難で、野外体験を重ねることでしか対策はない。

いかなるハチでも刺されると、相当に痛い！ 痛みは継続される。幼児には耐えられない。**近づかない**が最も有効な回避策だ。

——としながらも、春のレンゲ畑でお弁当を食べたり、楽しいひとときをすごしたい。そのレンゲ畑には、よく観察するとミツバチが多くいる。このミツバチたちはおとなしい。こうした「体験」が必要ということだ。

マムシ ヤマカガシ 本州に生息する毒ヘビ



10円貨を並べた模様。太さも硬貨に相当。



おそれられるマムシだが実際に出会うことはあまりない。田畑や里山にふつうに生息する。目に触れにくいというだけだ。つまり、気づかず災難に遭うということはある。一方、ヤマカガシは他のヘビ（シマヘビ・アオダイショウほか）と同様、遭遇しやすい。が、おとなしい。そのため、子どもがつかんで遊ぶのもこのヤマカガシだ。乱暴のあまり、かまれると猛毒で危険。野外体験を積むと、マムシの発見も容易になる。遠くから飛びついてくることはないので、近づかなければよい。

安全を担保するもの

どれほどに留意しても事故は不幸にして起きる。その事故を未然に防ぐにはどうすればよいだろうか。対象児やその集団をよく観察することだ。安全に配慮することは当然だが、より重要なことは、子どもの行動や言動をよく観察する。安全面に限れば、指導者が複数であること。役割の分担が適正であること。活動計画書に基づき、共通理解を保持していること。

1: 「不快」と「危険」の区別をする。

2: 事故は複数の原因があわさって起きる。

夢中になって遊んでいる子には、もっと遊ばせたいという気持ちが保育者にわく。体力のあるあいだは、つまずいてこけても手でからだを支えることができる。しかし、午後、特に夕方にかけて疲れてくる。疲れてくると顔面や頭部を打撲するなどして大きなケガに結びつく。したがって、「遊びをやめる」タイミングを経験で覚えることが大切だ。「もう少し遊びたい」と望んでも、潔く切り上げ、気分を転換させよう。

3: 「こわい」を強要しない。励ますことは、ケガにつながる。

子どもはコワイと感じると、からだをまるめたり、頭や顔を守る。しかし、無理にやらせたり、過度な目標を意識させると、自分でからだを守れない。したがって、「励まして」やらせることは必ずしも適切でない。ケガを誘うだけでなく、ほめてもらうことが目的で行動するようになる。ほめてもらおうと「頭を使う」ようになると、からだを固くさせてしまい、からだのバランスをくずしやすくなる。頭を使ってしまい、まるくなったり、頭や顔を守ることが遅れる。

4: 行動中の体力回復は早くみえても、翌朝に熱を出しやすい。

日射しの強い夏、遊んでも道を歩いても、汗をかきながらも、意欲的な子どもは驚くほど疲れを見せないことがある。木陰で小休止をとっても、子どもの回復は早い。そのため、調子にのって過剰に行動させると、翌日、熱を出すことがある。子どものペースだけで判断してはいけない。

5: 熟知した上で、危険を恐れず。

指導者は、苦心して設定した環境や指導方法を、「もっと遊びたい！」などと子どもが評価したとき、子どもの要求を聞き入れてしまいやすい。子どもの発達や体力を理解せずして指導することで、それが事故を招く。

安全を確保するには、日頃から、子どもに対する観察力が安全を担保することになる。子どもの行動様式を観察して身につけることだ。そうした配慮があって、子どもは自然のなかでたくましく育つ。

人工構造物は安全か？

こわいことは、しない・させない。危険なことは避ける。そんなあたりまえのことを守ることで、大きな事故は防げる。コンクリートで固められた人工護岸は足を踏み外した瞬間、そこは地獄だ。

子どもは、落ちることを予知できないので、放置するとコワサ半分、歩きたい子が登場するものだ。だから、絶対に近寄らせない。その一方、草むらもある土手や池のふちは用事深く歩く。危険はどこにも潜んでいるから、安全の確認を怠ってはならないが、安全がほどこしてありそうな、つまり、安心感をもたせてしまう人工構造物は危険と認識しておく必要がある。



ある幼稚園の園庭。防護柵はなく、池の縁は自然石。

砂場のバイ菌

//私はこれまで、砂場が子どもの保育にとって、大変重要であることを繰り返し述べて

きた。砂場にはイヌやネコの糞があって大腸菌がいるからという理由で、子どもたちを砂場で遊ばせることを敬遠する人が多い。しかし、泥んこになって遊ぶことによって、さまざまなバイ菌とつきあう機会も増え免疫力もつくのである。//
藤田紘一郎 寄生虫学、熱帯医学、感染免疫学を専門とする医師『水の健康学』新潮社 p15

虫よけスプレー

市販品の多くは、主成分がディート。扱いには健康上の注意が必要だ。

服装

夏でも、長袖・長ズボンが安全上好ましいが、幼児は熱がこもりやすいので、状況に応じて判断する。

リュックサックと水筒

幼児が背負うリュックの重さは、2kgを超えないようにすることが望ましい。

水筒はリュックに入れるのが望ましい。難点は重いこと。工夫を期待したい。

道に迷う危険

① 地図は、迷う前にみる。

迷ってからみるのは、おそい。

② 人の後ろを100回「連れられて」も道は覚えられないが、たった1回先導するだけで、道は覚えられる。

③ 「行く道」と「帰る道」、同じ道でも向きが変われば景色も変わる。これはけっこう危険。解決策は、下見を十分に行うこと、これに尽きる。

